20093

膝下動脈病変に対するPPI施行時におけるNIRO-200NX測定の有用性の検討

[1]JA長野厚生連 篠ノ井総合病院、[2]JA長野厚生連 篠ノ井総合病院、[3]JA長野厚生連 篠ノ井総合病院
桜沢　貴俊[1]、小林　祐治[1]、近藤　文麿[1]、高沼　和幸[1]、尾崎　稔[1]、宮嵜　大介[1]、関原　宏幸[1]、冨田　加奈子[2]、中島　淳[2]、神崎　佑介[3]、平林　正男[3]、丸山　拓哉[3]、橋詰　直人[3]、矢彦沢　久美子[3]

【目的】

近赤外分光法を用いたNIRO-200NX(以下 NIRO)は組織の酸素化状態を反映しており、主に頭部酸素モニタリングに活用されているが、PPI領域では十分に検討されておらず標準的なモニタリングとしては用いられていない。今回、膝下動脈病変に対するPPI施行時のNIROで観察されたパラメータの変化を遡及的に調査し、測定の有用性について検討したので報告する。

【対象・方法】

対象は2015年に当院にて膝下動脈病変に対しPPIを施行した39名で、対象疾患はASO 11名、CLI 25名、AAO 3名であった。

方法は、項目1として、測定部を両足底部とし、対象疾患別に治療側と非治療側とで治療前後におけるパラメータとABI、TBIの変化を検討した。項目2として、対象期間から2016年5月までの治療側の下肢予後について検討した。

【結果】

項目1では、全疾患において治療側が非治療側に比べ、TOIとABIの前値が低い傾向にあり、治療前後でTOI、O_2Hb、nTHI、ABIの値が改善し、Angio像と相関する傾向にあった。GW不通過症例においては、各パラメータの改善は得られなかった。また、治療中に急激なTOI、O_2Hbの低下、HHbの上昇を認め、早期に末梢閉塞を発見できた1症例を経験した。項目2では、再閉塞・Amputation率がCLI、ASO、AAOの順に高くなった。

【結論】

NIROによるモニタリングは、手技にparallelに反応することから合併症の早期発見に寄与する可能性があり、NIRO測定は有用であると考えられた。ただし、示す値がendpointに影響を与えうるかなどは中長期的な観察が更に必要となる。